

平成9年度病害虫防除基準（水稻）に採用した主な薬剤とその利用法

水稻の紋枯病対象のフラメトピル粒剤、いもち病（穂いもち）対象のピロキロンパック剤、薬剤抵抗性イネドロオイムシ対象にエトフェンプロックス粉剤・乳剤を平成9年度の病害虫防除基準に新しく採用した。これらの防除薬剤の特徴と、対象病害虫の生態や発生状況に応じた使用法を紹介する。

表1 フラメトピル粒剤の紋枯病防除試験結果

供試薬剤	処時	発病度					防除価
		8/2	8/17	8/24	9/3	9/13	
フラメトピル 粒剤 (リンバ [®])	-38	0	1.3	4.6	13.4	20.0	64
	-22	0	0.4	4.2	10.4	15.4	72
	-3	2.1	2.1	2.9	6.7	10.4	81
対 照 (モカッ)	-38	0	2.5	10.0	23.8	34.6	37
	-22	0	0.9	4.2	16.3	28.0	49
	-3	1.7	4.6	10.0	22.9	32.1	42

（平成2年農試病害虫科・雫石現地試験）

【ピロキロンパック剤】

従来使用してきたピロキロン剤（コトツ[®]粒剤）を投げ込み用の薬剤（コトツ[®]パック）として新しく開発したもの。穂いもち対象に50gのパックを10a当たり13個圃場内に均一に投げ込む。拡散を妨げる藻やウキクサ等が多発している場合、および黒ボク土壌では残効が劣るので使用しない。

葉いもち多発時には、投下位置から離れると十分な防除効果が得られない。



表3 カーバメート系殺虫剤抵抗性イネドロオイムシに対する有効薬剤一覧

薬剤成分名	製 剤
エトフェン [®] ロックス	トロン [®] 粉剤、乳剤、粒剤
シロブ [®] ロトリン	シロサ [®] ル粒剤、シロバ [®] ック
ペンシル [®] タツ	ル [®] ハン粉剤、水和剤
カ [®] タツ	パ [®] ダン粒剤（箱施用）
エ [®] セクト [®] チオシラム	エ [®] カ [®] ト粒剤（箱施用）
ブ [®] バ [®] フォス	カ [®] ヤ [®] ス粒剤（箱施用）
PMP	PMP(ア [®] バ [®])粉剤、水和剤

【フラメトピル粒剤】

フラメトピル粒剤(リンバ[®]-粒剤)は、出穂前30日～5日前まで使用できるので、防除要否判定を行ってから処理が可能になる。

表2 ピロキロンパック剤のいもち病防除効果

処理6月下旬，7月下旬

試験年次	試験場所	調査場所	防 除 価	
			葉 [®] 仔*	穂 [®] 仔*
平6	北上	投下位置 ～5m離部	87	-**
		対照全面	43	-
		対照全面	51	-
平8	雫石	(平均) 対照全面	33	-
		(平均) 対照全面	75	-
平8	雫石	(平均) 対照全面	95	97
		対照全面	97	98

*葉いもち対象10個、穂いもち対象13個/10a

**平成6年は穂いもち少発生で判定不能。

【エトフェンプロックス粉剤、乳剤】

県内各地でカ[®]-バメ[®]-ト系殺虫剤に対する薬剤抵抗性イネドロオイムシの発生が認められておりこれに対し、効果の高いエトフェンプロックス粉剤(3kg/10a)、乳剤(2,000倍)を採用した。

エトフェンプロックスは合成ピレスロイド系薬剤で蚕毒が強いので養蚕地域では使用しない。